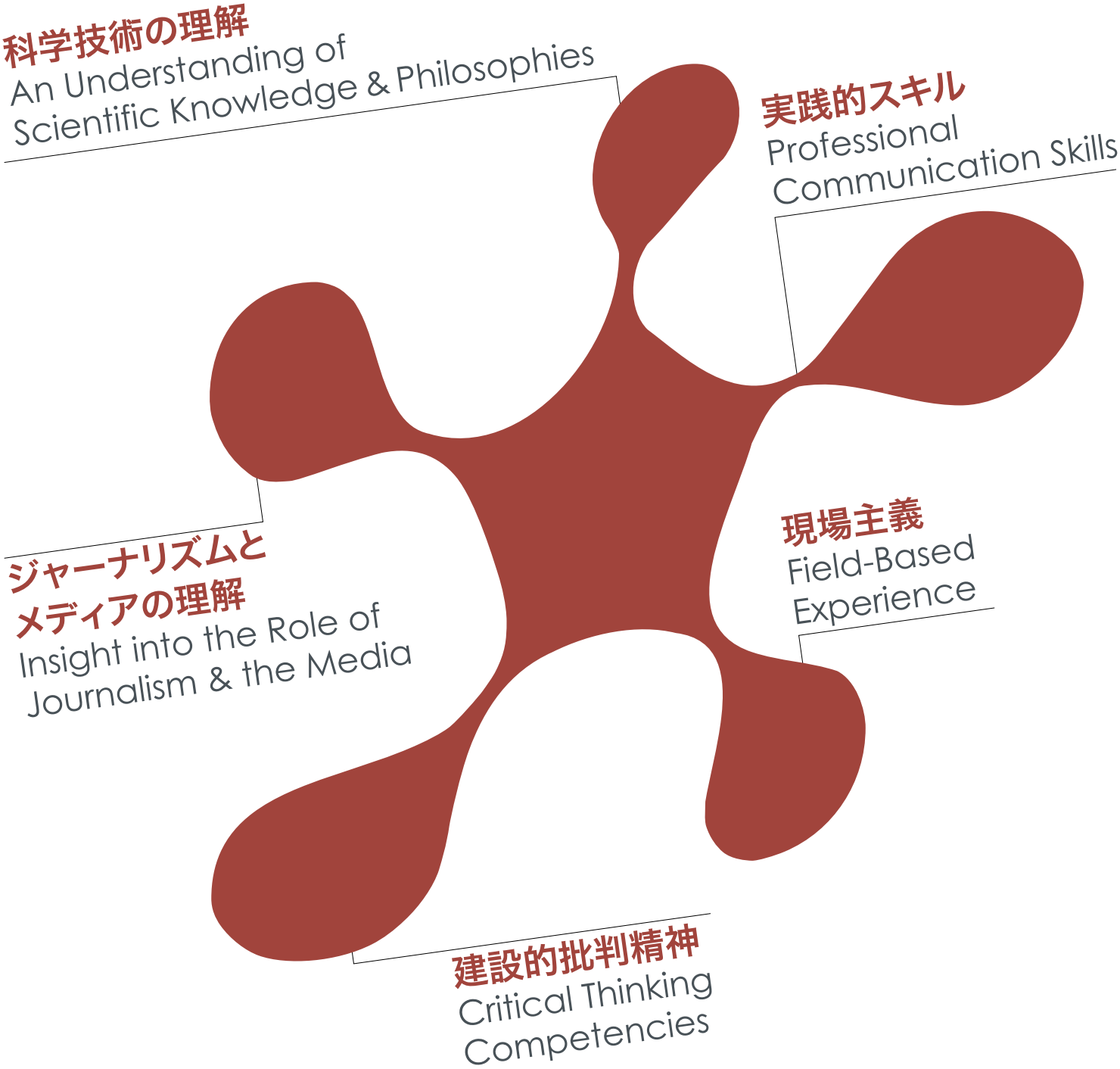
MAJESTy

科学技術ジャーナリストに必要とされる5つの要素



TV電話や宇宙ステーション建設からクローン技術にいたるまで、20世紀にイメージされていた未来の技術は現実のものとなりました。しかし、著しい発展を遂げた科学技術だからこそ、社会で問われる問題も広く、そして深い。21世紀のいま求められているのは、科学技術情報へのリテラシー。———私たちは、科学技術を冷静に見つめるスペシャリストを養成します。
そして、より多くの人々が科学技術リテラシーをもった、新しい社会をめざします。

科学技術を語る責任が私たちにはきっと、ある。

科学技術ジャーナリストを目指して

MAJESTyでは、つぎの５つの能力を養成します。

科学技術の理解 An Understanding of Scientific Knowledge & Philosophies

科学技術ジャーナリストには、科学や技術の専門知識はもちろんのこと、それに関連する哲学・歴史・社会論を踏まえた体系的な知が求められています。科学技術とその背景を幅広く学習し、その問題点を論じられるような総体的な視点を育成します。

●主な授業区分：基礎部門、イシュー領域、自然科学基礎知識

ジャーナリズムとメディアの理解 Insight into the Role of Journalism & the Media

ジャーナリズムの意義、そしてメディアの役割が改めて問い直されている現代、コミュニケーション手段の多様化は世界の構造そのものを大きく変革しようとしています。ジャーナリズムの理論的な学習を通じ、過去を踏まえ未来を見通す“眼”を養成します。

●主な授業区分：ジャーナリズム・メディア研究、イシュー領域

建設的批判精神 Critical Thinking Competencies

ジャーナリストには批判精神が求められています。しかし単なる批判に終わるのではなく、社会的公正の視点から問題を提起することで、より良い社会を実現していく原動力となることが大切です。授業、そして仲間との議論を通じ、多角的な問題意識の体得を目指します。

●主な授業区分：各種授業におけるディスカッション、ディベートやセミナー等

現場主義 Field-Based Experience

インターネットの発達によって、いながらにして多くの情報が得られるようになった現在。だからこそ、科学技術と報道の現場で、じかに物事を見聞きし、人と対話して得られる情報の重要性が増していると言えます。各種のフィールド活動を通じ、現場に根ざした視点を養成します。

●主な授業区分：実践部門

実践的スキル Professional Communication Skills

ジャーナリストが情報を収集・編集・発信するには、取材力、分析力に表現力といった実践的なコミュニケーション・スキルを身につけていることが必要です。インタビュー、リサーチ、ライティングなどの授業を通じ、これらの基礎的能力を育成します。

●主な授業区分：方法論科目、知識情報・リテラシー科目、実践部門

Total Concept

未来志向 An Orientation Toward the Future

授業を通じて以上の５つの要素を体得し、さらに仲間と切磋琢磨していく毎日のなかで、ひとりひとりの学生が先見性を持った科学技術ジャーナリストとして、活躍していくための“姿勢”を獲得できる。

――私たちのプログラムは、そんな場の提供を目指しています。

プログラムで学べること

科学技術ジャーナリストを目指すための、豊富なカリキュラムを提供します。

ジャーナリズム・メディア研究	ジャーナリズムとメディアの理解、建設的批判精神
方法論／知識情報・リテラシー科目	実践的スキル
基礎部門／自然科学基礎知識	科学技術の理解、ジャーナリズムとメディアの理解、 建設的批判精神
イシュー領域	科学技術の理解、建設的批判精神
実践部門	実践的スキル、体験主義

区分			科目名称	
論文指導			科学技術論演習	
			ジャーナリズム論演習	
学科目	政治学研究科共通科目	ジャーナリズム・メディア研究	政治ジャーナリズムの現在 放送ジャーナリズムの現在 ウェブ・ジャーナリズムの現在 ジャーナリズム論A ジャーナリズム史 映像ジャーナリズム論A メディア論 メディア文化論 広告論 科学広報・コミュニケーション論 知的財産権法	出版ジャーナリズムの現在 パブリック・リレーションズの現在 マス・コミュニケーション理論 ジャーナリズム論B 科学技術報道史 映像ジャーナリズム論B メディア産業論 メディア史 パブリック・リレーションズ 情報法 マスメディアの法と倫理
		方法論科目	データの見方 Research Design 公共の哲学	リサーチデザイン 表現の自由の基礎理論 Normative Political Theory
		知識情報・リテラシー科目	論文作成入門 社会調査実習（マーケティング） 情報発信実習Ⅱ 英語プレゼンテーション（アカデミック） 英語ライティング入門（ジャーナリズム） ジャーナリズム研究のための日本語入門	社会調査実習（世論） 情報発信実習Ⅰ 英語ライティング（アカデミック） 英語リーディング入門（ジャーナリズム） 英語ライティング実習（ジャーナリズム）
	科学技術ジャーナリスト養成プログラム科目群	基礎部門	科学技術政策論 科学方法論 民間企業における研究開発 医療と社会	科学技術ジャーナリズム概論 科学史 遺伝子技術概論 人類学入門
		イシュー領域	生命倫理 環境政策と計画 開発と健康ジェンダー 情報技術と情報産業	リスク管理 エネルギーと環境 ネットワーク社会の実相
		実践部門	科学コミュニケーション実習1A 科学コミュニケーション実習2 科学コミュニケーション実習4 メディア制作実習1B メディア制作実習3A インターンシップ	科学コミュニケーション実習1B 科学コミュニケーション実習3 メディア制作実習1A メディア制作実習2 メディア制作実習3B
		自然科学基礎知識	自然科学概論1（物理学基礎） 自然科学概論2（生物学研究方法論） 自然科学概論3（地球環境学入門）	

科学技術ジャーナリスト養成プログラム＝MAJESTy

私たちは、科学技術ジャーナリスト養成プログラムに、MAJESTy（Master of Arts Program for Journalist Education in Science and Technology）という愛称をつけました。 これは、正規の修士課程プログラム（MA）であることを示すとともに、一般に科学技術コミュニケーションと呼ばれる領域の中でも、特にジャーナリストを育てるプログラム（JE）であることを強調するためです。

MAJESTyとは本来、「王者の威厳／堂々たる風格／尊厳」といった意味を持つ言葉ですが、本プログラムを通じて、科学技術に対する畏怖の念を持ちつつ、確かな目で未来を見つめることのできる、堂々たるジャーナリストを育てていきたい、という願いを表わしています。

MAJESTyに参加された方の早稲田大学における所属、獲得できる学位などは次の通りです。

所属：大学院政治学研究科「科学技術ジャーナリスト養成プログラム」／取得できる学位：修士（ジャーナリズム）／標準修了年限：2年間

お問合せ先

〒169-8050　東京都新宿区西早稲田1-6-1

早稲田大学大学院政治学研究科(3号館1F)

Tel. 03-3208-8534　Fax. 03-3204-8957

E-mail:gspolit-web-master@list.waseda.jp

MAJESTy

Master of Arts Program for Journalist Education in Science and Technology, WASEDA UNIVERSITY

http://www.waseda-majesty.jp

政治学研究科長あいさつ

佐藤正志 Seishi SATO　早稲田大学政治経済学術院 教授

「科学技術ジャーナリスト養成プログラム」は、早稲田大学大学院政治学研究科の新たな挑戦です。

第一に、これは新しいコンセプトに基づく専門ジャーナリスト養成への挑戦です。政治学研究科は、これまで多くの優れたジャーナリストを輩出してきました。本プログラムがその伝統と実績に立つものであることは言うまでもありません。しかし同時に、このプログラムは国際的に見ても最も先進的な試みとなるよう、設置にあたっては徹底した海外リサーチを行い、いま真に求められている専門ジャーナリストとは何かを考えることから始めました。そのコンセプトに基づき、私たちは、プロフェッショナルなジャーナリストとして、倫理、知識、技能において真に実践的な人材の育成を目指すとともに、科学技術の学問的知識の世界と一般社会との間の相互関係を作り上げる公共的コミュニケーションの担い手たるジャーナリストとして、専門性においても卓越した人材の育成を目指します。

第二に、本プログラムはこれまでになかった本当の意味での学際的な教育プログラムへの挑戦です。これが文部科学省科学技術振興調整費による新興分野人材育成プログラムの一つとして実施されるというまさにそのことが、科学技術を専門とするジャーナリストが、現代社会において多く求められているにもかかわらず、現実にはその社会的ニーズを満たすにはきわめて少ないことを物語っています。そうした現状は、ジャーナリスト養成が真に学際的な事業であるという困難さからもたらされてきました。ジャーナリズムという、社会科学・人文科学系のなかでも複合・応用的な学問分野と、自然科学・技術に関する研究を学際的にしっかりと結びつけるプロジェクトは、まさしく「マスター・サイエンス」としての政治学を探究する政治学研究科だからこそ実現できました。私たちは、現代社会と科学技術という現代の最も重要な問題を、最先端の接点で捉えることができる鋭敏なジャーナリストの養成を目指します。

プログラム・マネージャーあいさつ

谷川建司 Takeshi TANIKAWA　早稲田大学政治経済学術院 教授、映画ジャーナリスト

担当授業：メディア産業論、メディア制作実習2、インターンシップ、演習（論文指導）担当

ⓒ髪化粧2005年11月号掲載／㈲髪の文化舎

人生にとって一番大切なものは何か？　それは人との繋がりと本との出会いではないかと思います。僕自身が高校時代の恩師に贈られた言葉で、今でも肝に銘じて実践していることに「本は出遭ったその時に買う」ということがあります。たとえその時点では忙しくて読む時間がなさそうでも、後から本当にその本が必要になったときに手に入るとは限らないもの。金欠の学生なら一食抜いてでも本を買うべし（これは山本武利先生の言葉の受け売り）。

「好きこそものの上手なれ」という言葉がありますが、やはり自分が一番興味を持てることこそ、とことんまで深めていけるものだと思います。一度だけの人生、本当にやりたいことをやらずして他に何をする？

学生のひとこと

家田有美子

早稲田大学MAJESTy 修士2年

3年間勤めた会社を辞めて大学院に通うことにしたのは、私にとって大きな決断でした。けれど、今とても充実した毎日を送っています。

取材に基づく記事の作成や新聞社でのインターンシップといった実践的な演習や、学生が自ら企画するイベントやワークショップ。さまざまなバックグラウンドをもつ先生方や仲間たちと一緒に学ぶなかで、科学的な視点で物事を幅広くとらえられるようになったのではないかと感じています。考える場、そして考えたことを実行する場を与えてくれるのがMAJESTyの良さだと思います。

今春から出版社への就職が決まりました。引き続き大学院で勉強を続けながら、ここで学んだことを生かして新たなフィールドで頑張っていきます。

安田 純

早稲田大学MAJESTy 修士2年

MAJESTyの魅力。それは、現代の「コーヒー・ハウス」ともいえる独特の空間にあります。

学部で船に乗って海中のプランクトンを追いかけていた人や、宇宙法を研究していた人、フリーで活躍しているライターやカメラマン。こうした多種多様なバックグランドをもった人たちが集まり、科学技術の未来から、恋愛の真髄まで、毎日さまざまな議論が気軽にかつ真剣に行われています。これがとにかく楽しい。

ときに加わる教員の方も含め、年齢も職業も育ってきた環境も異なる人たちとの議論は、刺激的で新たな発見の連続です。そして、ここで出会った仲間とバングラデシュへ災害援助ボランティアに行き、貧困や格差社会、環境問題に対する新たな視点も得ました。

カリキュラムの充実だけではない、学生の多様性。これがMAJESTyの魅力であり、最大の強みだと思います。

教員紹介 演習（論文指導）担当

小林宏一 Koichi KOBAYASHI

早稲田大学政治経済学術院 教授
担当授業：メディア論、メディア産業論、ネットワーク社会の実相、科学技術政策論

月並みだが、ジャーナリストには広い視野が求められる。理系・文系それぞれの領域から出発した学生諸君が相交わるこのコースは、それ自体が視野を広めるに格好の「空間」であることを認識し、ここで、われわれ教員も含めた「知のシンポジオン」（時には文字通りの「饗宴」）がくり広げられたらいいなあ、と考えている。

谷藤悦史 Etsushi TANIFUJI

早稲田大学政治経済学術院 教授
早稲田大学現代政治経済研究所長
担当授業：マス・コミュニケーション理論、パブリック・リレーションズ

さまざまなことに好奇心を持つこと。最も得意とする分野を確立すること。知識を集約・体系化するメソッドを身につけ、新たな発見に結びつける努力を怠らないこと。

花田達朗 Tatsuro HANADA

早稲田大学教育・総合科学学術院 教授
担当授業：ジャーナリズム論A

ジャーナリズムはひとつの「イズム」です。同時代の森羅万象の出来事が観察対象となりますが、その観察、記述、公表の仕方に「イズム」が働き、結果として社会的機能を担います。その「イズム」が何であるかを理解し、実践する者が「イスト」だと思います。ジャーナリスト養成とはその意味での「イスト」の育成だと私は考えています。

山本武利 Taketoshi YAMAMOTO

早稲田大学政治経済学術院 教授
担当授業：広告論、ジャーナリズム史

専門はマス・コミュニケーション、メディア史、情報史。新聞を中心とした活字メディア、ラジオ、テレビ、最近のニューメディアなどについて研究を行っています。また、雑誌『インテリジェンス』の出版や、プランゲ文庫をもとにした「日本占領期雑誌記事データベース」構築にも力を注いでいます。

岡本暁子 Kyoko OKAMOTO

早稲田大学政治経済学術院 准教授
担当授業：科学方法論

科学と社会をつなぐ、素晴らしい科学コミュニケーターになってください。そのためには何を学ばなければならないのか。何を研究しなければならないのか。自分自身でしっかり考え、充実した大学院生活にしてほしいと思います。

内田亮子 Akiko UCHIDA

早稲田大学国際教養学術院 教授
担当授業：人類学入門

「確信は知識よりも無知から生まれることが多い。あれこれの問題は科学では決して解明できないと自信ありげに断言するのは、より多くを知っている人々ではなく、より少なくしか知らない人々である」（C・ダーウィン『人間の進化と性淘汰』序より）。科学、エセ科学、反科学を創り出す人間という生き物を一緒に考えましょう。

伊藤 守 Mamoru ITO

早稲田大学教育・総合科学学術院 教授
担当授業：メディア文化論

専門は社会学で、個人的には「理論好き」。しかし、社会科学の「おもしろさ」はやはり「自分で調査して新しい知見」を作り上げること。ジャーナリストの仕事の一つの側面もそこにあると思う。自然科学と人文社会科学の垣根を越えた深い思索から、新しいコンセプトや言葉を編み出して、複雑な現実に切り込んでいってください。

若杉なおみ Naomi WAKASUGI

早稲田大学政治経済学術院 教授
元 国立国際医療センター研究所 疫学統計研究部長
担当授業：医療と社会、リスク管理、開発と健康ジェンダー

良き伝え手になるために大切だと私が考えているのは、知識の量ではなく、洞察力、思考力、人間の魅力です。それらはひとえに経験と苦労が作るものだと思っています。あらゆる経験や苦労を厭わず、考え、語り、書いてください。科学技術や芸術は人間の所産として瞠目感嘆すべきものですが、どこに向かうのかわからない「あやうさ」も持っています。だからこそ科学を伝える仕事は面白いのではないでしょうか。

教員紹介 演習（論文指導）担当

青山聖子 Seiko AOYAMA

早稲田大学政治経済学術院 客員教授、
サイエンスライター
担当授業：科学コミュニケーション実習2

科学は、とっつきにくい知識ではなく、生き生きした人間の営みの所産です。それを自分なりの言葉で伝えるのは、やりがいのある仕事です。これまでの現場経験についてお話しすることが、みなさんのお役に立つことを願っています。

瀬川至朗 Shiro SEGAWA

早稲田大学政治経済学術院 教授、
早稲田大学ジャーナリズムコース
プログラムマネージャー
担当授業：生命倫理、
科学コミュニケーション実習4

ルノアールの代表作「舟遊びの昼食」には、男女14人が描かれています。帽子がエチケットだった時代であり、それぞれ職業に応じた帽子をかぶっています。ただ、1人だけ無帽の男性がいます。その人の職業はジャーナリストなのです。無帽は型にはまらない自由のシンボルと読み取れるようです。学生の皆さんには、この「無帽のジャーナリスト」を心に刻んでもらいたい。

西村吉雄 Yoshio NISHIMURA

早稲田大学政治経済学術院 客員教授、
東京工業大学監事、元 日経エレクトロニクス編集長
担当授業：情報技術と情報産業、
民間企業における研究開発

最新の科学技術の成果は、どのようにして一般生活者に伝えられているでしょうか。最大のチャンネルは、企業にいる技術者が発信する新製品や新サービス、私はそう信じています。企業で仕事をしている技術者を重視したい、そこに技術ジャーナリストだった私の経験を活かしたい、そう思っています。

小出重幸 Shigeyuki KOIDE

読売新聞東京本社科学部 部長、
早稲田大学政治経済学術院 客員教授
担当授業：科学コミュニケーション実習3

科学技術ジャーナリストには、まず優れたジャーナリストであるかどうかが問われます。科学はもちろん、「Something Another」―美術、音楽、文学、哲学、宗教など広範な領域への興味を広げ、仕事や旅などさまざまな社会体験をしてください。「体験」のうえにしか実学は積めないものだと思います。

森 達也 Tatsuya MORI

映画監督・作家、
早稲田大学政治経済学術院 客員教授
担当授業：メディア制作実習1B、映像ジャーナリズム論A

肩書きを聞かれるといちばん困る。テレビ・ディレクターで、映画も作り、最近はもっぱら執筆。これを統合する的確な語彙をどうしても思いつけない。しいて言葉にすればフリーター。まあそれもまたよし。大学にはいろんな教員がいる。フリーターだけど体験量だけは多い。仕事の関係でいろんな場所にも行っている。そんな男の講義を聴くのも一興。そんなつもりで履修してください。

綾部広則 Hironori AYABE

早稲田大学理工学術院 准教授

個人的には科学技術ジャーナリストは、科学技術の「評論家」であってほしいと思っています。よい評論家の存在がよい芸術を生むことにつながるように、よい科学にもよい評論家が必要ではないでしょうか。演習を通じて、鋭い鑑識眼をもった科学技術の「評論家」となるためのお手伝いができればと思います。

村山武彦 Takehiko MURAYAMA

早稲田大学理工学術院 教授
担当授業：環境政策と計画

環境や科学技術が関連したリスクの問題を中心に、社会はどのように関わり、どのような決定を行うべきかについて関心を持っています。現在進行中の問題はもちろん、原因がすでに消滅している場合や、まだ影響がはっきりしていない場合に、いかに「現場」の感覚で取り組めるかが課題だと考えています。

助手

大石かおり Kaori OHISHI

専門分野：応用化学、科学技術ジャーナリズム

富田 誠 Makoto TOMITA

専門分野：メディアデザイン

教員紹介

林 勝彦 Katsuhiko HAYASHI

科学ジャーナリスト塾塾長、
日本科学技術ジャーナリスト会議理事、
サイエンス映像学会設立準備委員長
担当授業：メディア制作実習1A

NHKで40年間、おもに科学・環境・医療番組やドキュメンタリーを制作してきました。NHKスペシャル「人体」「人体Ⅱ～脳と心」「人体Ⅲ～遺伝子・DNA」「チェルノブイリ原発事故」「脳死」「原爆症」などです。
科学ジャーナリストにとって大切な資質は、好奇心と十分な取材にもとづく健全な批判精神です。さらに、優秀な映像作品には①素材②視点③表現方法に何らかのsomething new が必要となり、創造性が不可欠です。

石塚雅彦 Masahiko ISHIZUKA

ジャーナリスト、元 日本経済新聞 論説委員、
元 The Nikkei Weekly 編集長
担当授業：英語リーディング入門、
英語ライティング入門、
英語ライティング実習
（ジャーナリズム）

「現代の知識人は、アマチュアたるべきである。アマチュアというのは、社会のなかで思考し憂慮する人間のことである。専門的かつ専門家むけの活動のただなかにおいても、知識人はモラルの問題を提起する資格を持つのだ」※。ジャーナリストにもよく当てはまるこの言葉を大事にしてきました。

※「知識人とは何か」
（エドワード・W・サイード、大橋洋一訳、平凡社、1995）

大岩ゆり Yuri OIWA

朝日新聞社AERA編集部
担当授業：科学コミュニケーション実習1B

政治記者から科学・医療記者に転じました。科学ジャーナリストも政治ジャーナリストも、取材対象が変わるだけでジャーナリストとしての本質は変わりません。永田町でもiPS細胞の研究室でも、取材していて自分で面白いと感じられることを大切にしていきたいです。医療を題材に、みんなで一緒に本をまとめたいと思っています。

橘 由里香 Yurika TACHIBANA

東京大学大学院総合文化研究科 客員講師
担当授業：科学コミュニケーション実習1A

科学ジャーナリストである前に、ジャーナリストであってほしい。他人を取材して語る前に、己をよく知り語れるようになってほしい、と考えます。実習を通して、みなさんが自分自身をよく知り、自分の視点を持てるようになるお手伝いができれば、と思っています。

横山広美 Hiromi YOKOYAMA

東京大学大学院理学系研究科広報室 准教授
担当授業：科学広報・コミュニケーション論

物理学、化学のノーベル賞のメダルの裏には、ネイチャーの女神のベールを持ち上げるサイエンスの女神の姿が刻まれています。人がいて初めて可能になるサイエンスの物語をつむぎだすと同時に、社会の中に根付くサイエンスの現実を、多角的、論理的に突き詰める力をみなさんとつけていきたいと思っています。

堂前雅史 Masashi DAUMAE

和光大学現代人間学部 教授
担当授業：遺伝子技術概論

もともとの専門は、動物のホルモンと行動の関係を探ることでした。人間の行動を遺伝子で安易に説明する言説が世間に流布される状況に関心を持ち始めてから、GMO、BSE、クローン技術など科学と社会の関係について考えるようになりました。授業では、一緒に現代の科学と社会の関係を読み解いていきましょう。

Mark JEWEL

早稲田大学政治経済学術院 教授
担当授業：英語ライティング（アカデミック）

Good journalism relies on clarity of expression. It is a simple principle that can be surprisingly difficult to put into practice. Yet when this principle is observed, the result is not just the communication of information but also a genuine contribution to our store of knowledge. That makes it a goal well worth aiming for.

Anthony P. NEWELL

早稲田大学政治経済学術院 教授
元NHKラジオ英語会話講師
担当授業：英語プレゼンテーション（アカデミック）

English is a key that will open many doors. I hope you will be able to grasp this opportunity to improve your English with both hands. Make it one of the keys that will provide an interesting and enjoyable future for you!

教員紹介

御代川貴久夫 Kikuo MIYOKAWA
一橋大学社会学部 教授
担当授業：科学技術報道史

単なる情報の伝達ではなく、情報の質を吟味できるジャーナリストを目指してください。

小山慶太 Keita KOYAMA
早稲田大学社会科学総合学術院 教授
担当授業：科学史

「真理は隠蔽されること以外、何も恐れるものはない」という精神を胸に、科学の報道に取り組んで下さい。

大石 裕 Yutaka OHISHI
慶應義塾大学法学部 教授
担当授業：ジャーナリズム論B

私の専門は政治コミュニケーション論です。ジャーナリズム論に関して、私は比較的「冷めた眼」で眺めています。なぜなら、ジャーナリズム論はコミュニケーション論、マス・コミュニケーション論の中にしっかりと位置づけられるべきであり、政治学（時には社会学）の研究成果がきちんと反映されるべきと考えるからです。そうしたジャーナリズム論を構想しています。

那須川真澄 Masumi NASUKAWA
早稲田大学政治経済学術院 専任講師
担当授業：インターンシップ、科学技術政策論

認知科学に興味をもっています。実感できることだから、難しいし面白い。社会にうめこまれた科学や技術の問題も、実感できるからこそ難しいし面白いのだと思います。みなさんと一緒に、考えをぶつけあいながら勉強していきたいです。

田中幹人 Mikihito TANAKA
早稲田大学政治経済学術院
ジャーナリズムコース 専任講師
担当授業：自然科学概論2（生物学研究方法論）、メディア制作実習3A、3B

生命科学は私たちヒトの生と死に深く関わっています。それだけに、科学技術ジャーナリズムの構造の中に生命科学が投げ込まれたときには、数多くの問題が浮かび上がってきます。手応えのあるこれらの問題に、みなさんと一緒に取り組んでいきたいと思います。

中村 理 Osamu NAKAMURA
早稲田大学政治経済学術院 専任講師
担当授業：自然科学概論1（物理学基礎）、科学技術ジャーナリズム概論

天文学は長い時間をかけて人間の世界観を変えることに貢献してきました。自然科学が多かれ少なかれもつこの側面を文化として捉える。私はそんな視点を大切にしています。みなさんとは科学研究の方法論と成果を通じて、科学報道を考察していきたいと思います。

山田 耕 Kou YAMADA
早稲田大学政治経済学術院 専任講師
担当授業：自然科学概論3（地球環境学入門）、エネルギーと環境

専門は地球惑星科学です。地球惑星科学という学問は、地球や惑星の誕生からそこで起こる様々な自然現象を解明することを目的とし、物理、化学、生物の知識をフル活用する学際的な学問です。地球惑星科学の一端を紹介することで、自然科学に対するみなさんの力をサポートできればと考えています。

吉戸智明 Tomoaki YOSHITO
早稲田大学政治経済学術院 専任講師、サイエンスライター
担当授業：メディア制作実習2、科学コミュニケーション実習4

有機化学と天文学の研究をしてきました。分野が異なれば研究の仕方、自然に対するものの見方が違ってきます。さまざまな角度から自然を見つめ、自然科学とは何かを考える。科学とは何か。技術とは何か。ジャーナリズムとは何か。それを常に考えていきたいと思います。